藤井寺市発掘調査概報　第5号

2011年3月
藤井寺市教育委員会

葛井寺遺跡（FJ2008－5区）

位置と環境

調査区は葛井寺遺跡の南側、葛井寺跡の南東200 mにあたる。分譲住宅建設の開発に伴い、道路部208 ㎡の発掘調査を実施した。

葛井寺遺跡は古代から近世にかけての複合遺跡で、古代には集落跡、生産遺跡、土壙群などが広く分布している。葛井寺の西側の仏供田池周辺では瓦窯が構築されており、それと関わる奈良時代の集落も見つかっている。また、瓦や土器を焼成するための粘土採掘孔も見つかっている。

葛井寺跡は寺伝では奈良時代に聖武天皇が建立したとされているが、実際は渡来系氏族である白猪氏（後の葛井氏）が造営主体となって建立した寺院で、出土瓦から7世紀第3四半期に建立されたことがわかっている。8世紀代には造営氏族である葛井氏が聖武天皇など皇室と深い繋がりをもち、一族から律師にまでなった大安寺僧慶俊が出ていることもあり盛行する。

図1　調査区位置図（S＝1：5,000）

葛井寺境内の調査では、主に7世紀前半の集落が見つかっており、造営氏族の本貫地と考えられる。

層位

盛り土、耕土の下、GL－90 ㎝（T.P.26m）で包含層上面にあたる。包含層はa・b・cの3層が認められ、西側ではa層のみ、中央部ではa・b・c層、東側ではa・b層が確認でき、土壙、溝、落ち込み、柱穴などを検出した。

遺構

a層の下ではSX02、c層の下ではSD01～03、SX01、SK03などが確認できた。

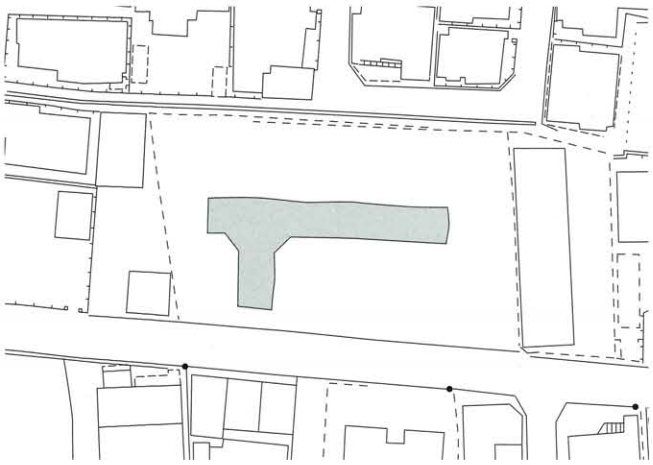
図2　トレンチ位置図（S＝1：1,000）

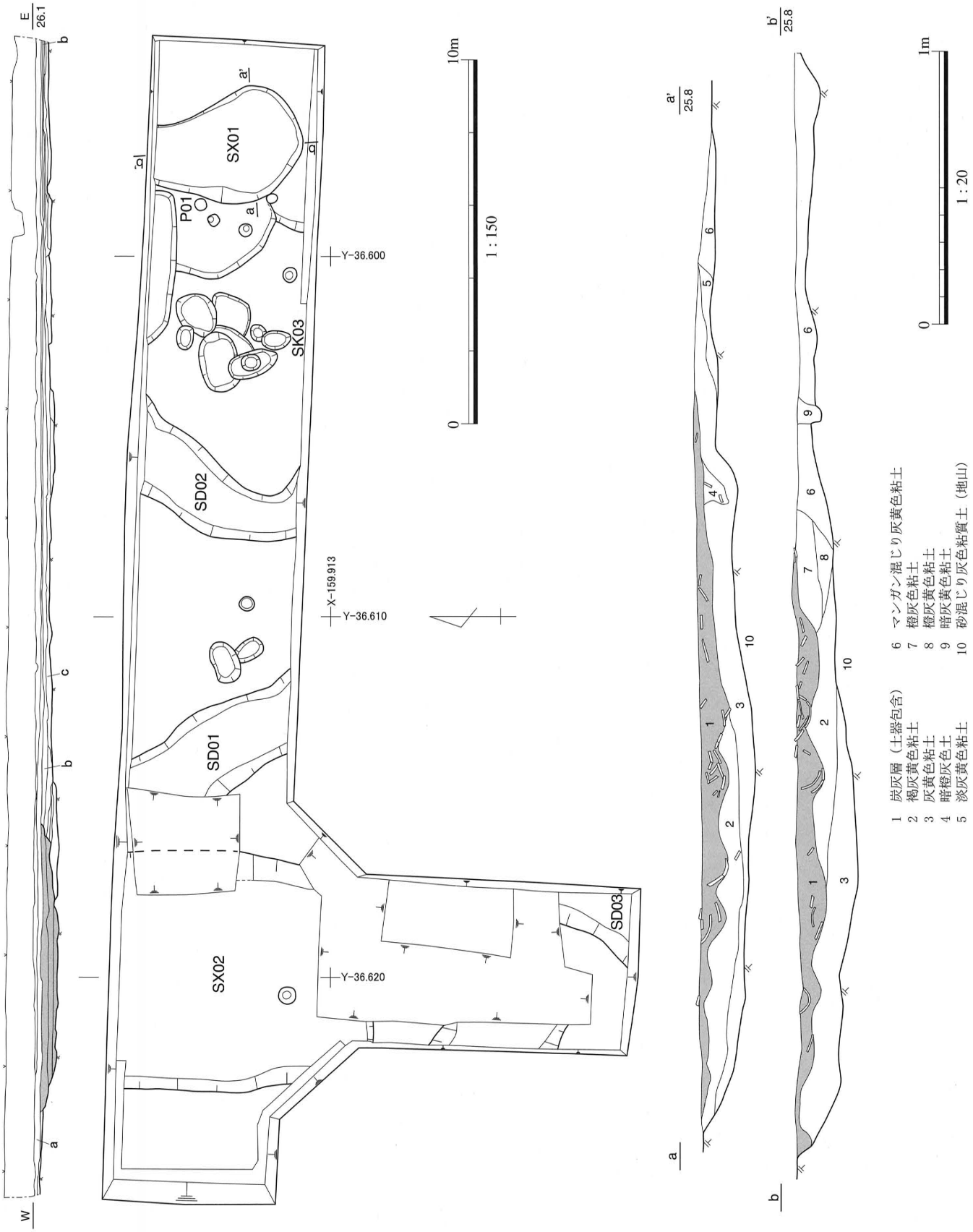
SX01
SX02
SD01
SD02
SD03
SK03
P01
Y-36.600
Y-36.610
Y-36.620
X-159.913
1 : 150
10m
0
1 : 20
1m
1 炭灰層（土器包含）
2 褐灰黄色粘土
3 灰黄色粘土
4 暗橙灰色土
5 淡灰黄色粘土
6 マンガン混じり灰黄色粘土
7 橙灰色粘土
8 橙灰黄色粘土
9 暗灰黄色粘土
10 砂混じり灰色粘質土（地山）

図3　遺構平面・断面図

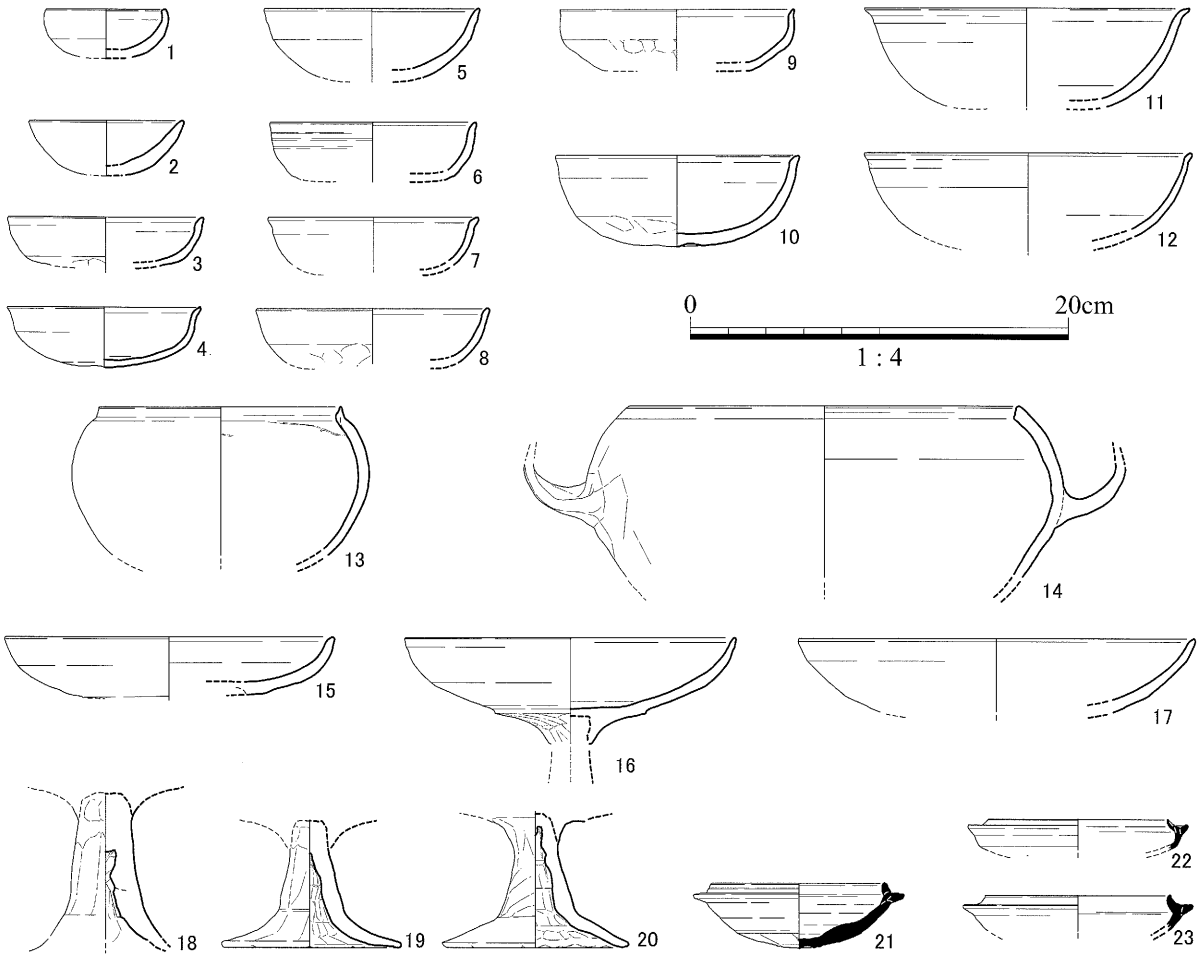

図 4　SX01 出土土器実測図 1

SD01　南北方向の溝で 4 層に分かれるが、遺物が出土しなかったため時期については不明である。やや方向は異なるが埋土の一致から SD03 と同一遺構の可能性が考えられる。

SX01　トレンチ東端で検出した東西 3.7m、南北 4m 以上、深さ 25 ㎝の遺構である。遺構は上層から焼土灰、炭などと共に 7 世紀代の土師器、須恵器が出土した。褐灰黄色粘土（2 層）、灰黄色粘土（3 層）、マンガン混じり灰黄色粘土（6 層）が埋土で被熱している。南北方向では、熱を受け橙色になったと考えられる橙灰色粘土（7 層）、橙灰黄色粘土（8 層）が確認できた。遺構壁面が硬く焼けしまっていないため、窯本体である可能性は低いが、付近に存在すると考えられる。

また、調査区の東 200m の HM07 － 16 区で 7 世紀中頃の粘土採掘孔が見つかっており、今回の遺構との関係が示唆される。

SX02　トレンチ西側で検出した遺構で北側は調査区外に出るが、東西 6.5 m × 南北 7m 以上の落ち込みで 25 ㎝の深さがあった。埋土は 3 層に分かれるが、遺物はほとんどが上層からの出土である。ここからは土師器、須恵器、瓦類など主に 8 世紀代の遺物が出土した。

遺物

主に SX01 と SX02 から出土した。

SX01　出土遺物としては、須恵器蓋坏、土師器坏、鉢、高坏、壺、鍋がある。

須恵器蓋坏（21 ～ 23）　坏 H 身が 3 個体出土している。口径 9.5 ㎝前後、受部径 11 ～ 12 ㎝で底部はヘラ切り未調整である。

土師器坏（2 ～ 12）　小型坏（2）と坏 C（3 ～ 12）とに分けられる。すべて表面が剥離しているため、調整が不明で、坏 G である可能性もある。

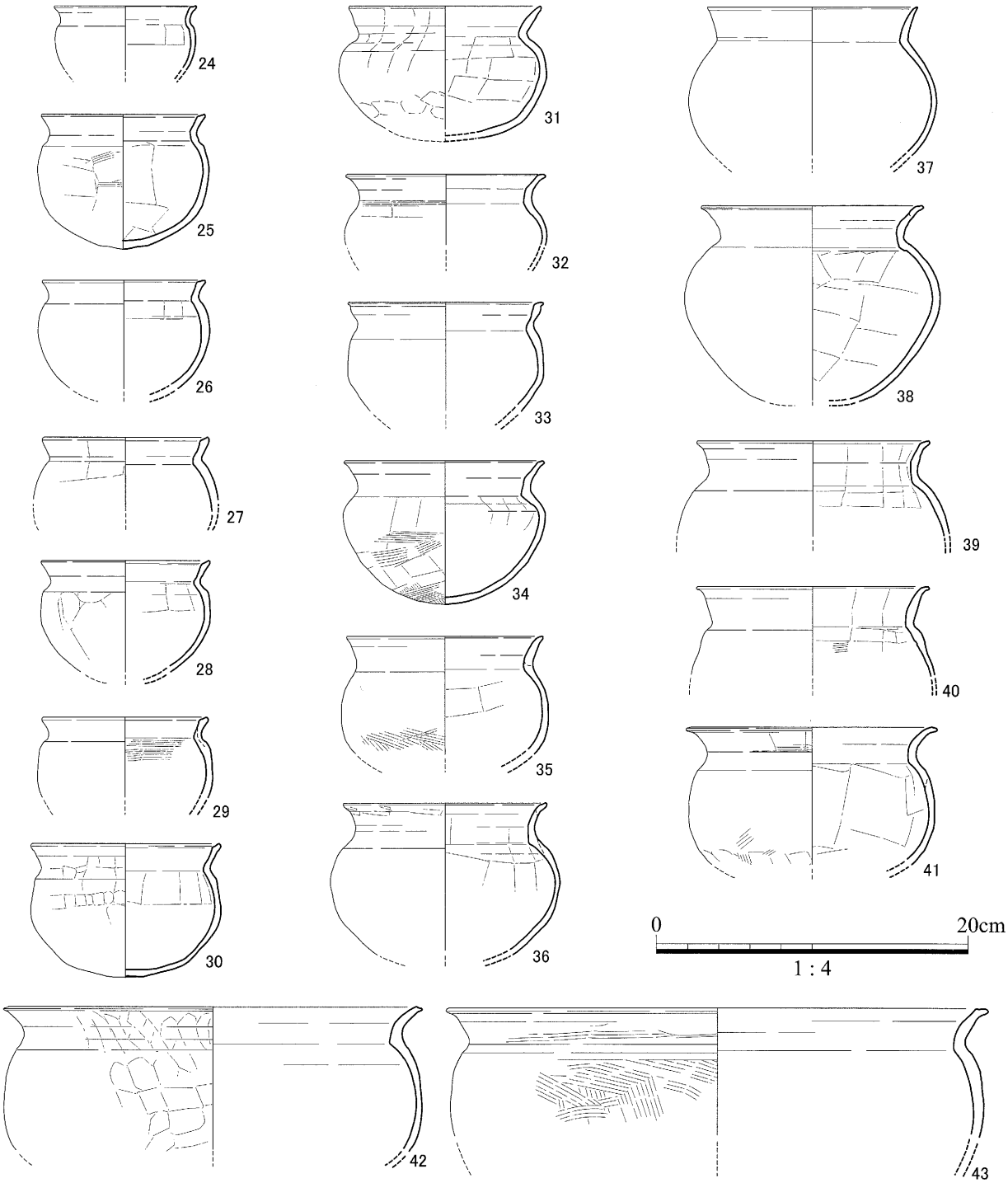

図 5　SX01 出土土器実測図 2

小型坏は口縁部が上方に立ち上がり、端部を丸くおさめている。坏 C は口径 10 ㎝前後（3・4）、11 ㎝前後（5 ～ 7）、12 ㎝前後（8 ～ 10）、17 ㎝前後（11・12）に分けられる。底部まで残っているものは少ないが、径高指数 31 前後になる。その中で 10 のように口径 12.9 ㎝、器高 9.9 ㎝で径高指数 37 と高いものも含まれる。

鉢　口縁部が内彎し、体部は丸い。把手の付く鉢 B（14）、と付かない鉢 A（1・13）とに分けられる。1 は口径 6.4 ㎝でミニチュアにあたるであろう。

高坏（15 ～ 20）　口縁部（15 ～ 17）と脚部（18 ～ 20）とに分けられる。口縁部は坏 C の形態をとるもの（15）と上方に開き、端部はやや立ち上がる一般的なもの（16・17）とに分けられる。脚部は脚柱部を絞り込んで、坏部に差し込み、まわりに粘土を充填する方法がとられている。脚柱部

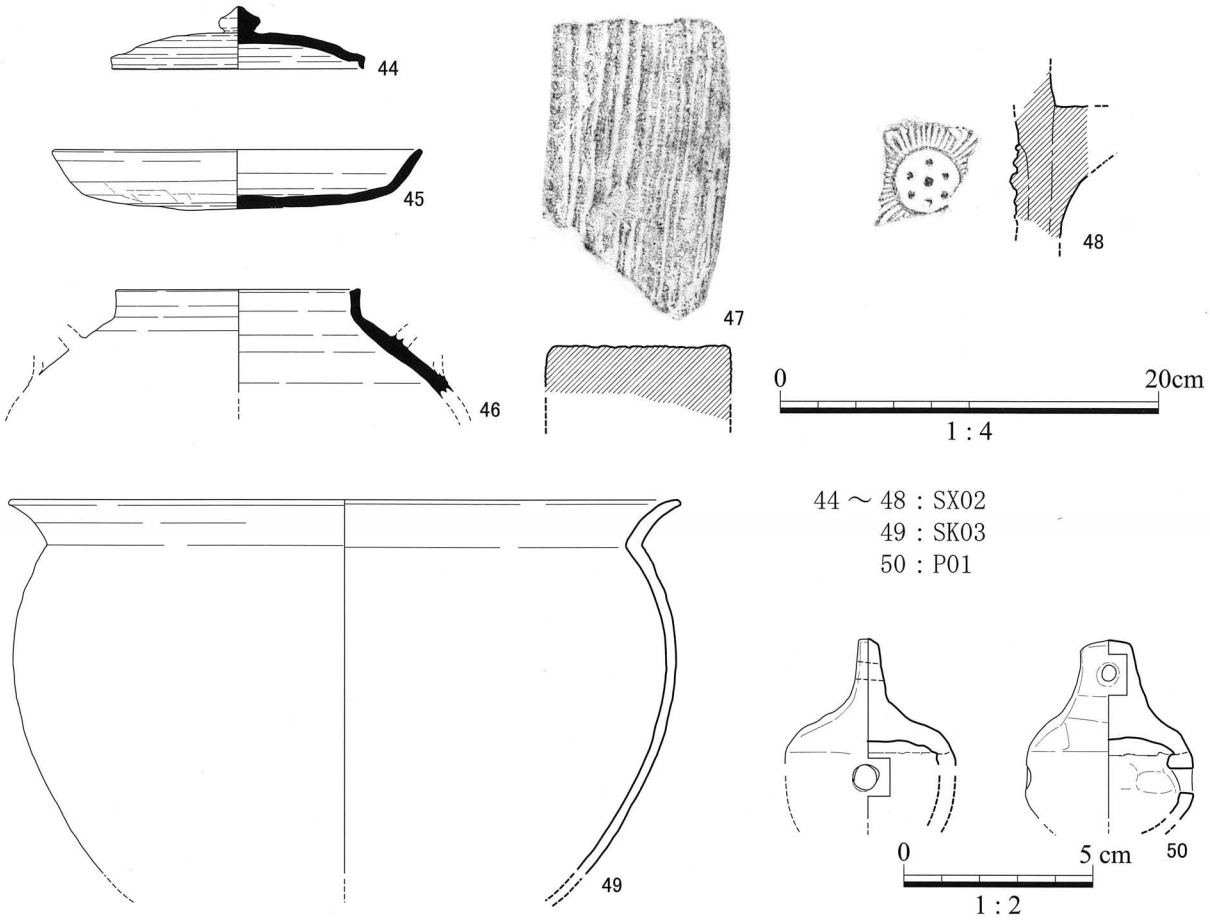

図 6　SX02・SK03・P01 出土遺物実測図

外面は 18・19 のように縦方向にナデて面をもたせているものもある。形態から 7 世紀中葉のものと考えられる。

壺　口径が 10 ㎝以下の小壺（24）、10.5 ㎝前後の Ⅰ 類（25 ～ 29）、12 ㎝前後の Ⅱ 類（30 ～ 35）、13 ㎝前後のⅢ類（36 ～ 37）、14.5 ㎝前後のⅣ類（38 ～ 41）に分けられる。

口縁部の形態は直立するもの（26 ～ 33・40）、外反するもの（31・37）、外彎するもの（24・25・32・34 ～ 36・38・39・41）に分けられる。口縁端部は丸くおさめるもの（31・37）、内側に面をもたせるもの（24 ～ 30・32 ～ 36・38 ～ 41）に分けられる。

体部はすべて口縁部より最大径が大きく、体部高が低く砲弾形になっているものと、高く球形に近いものとに分けられるが、砲弾形のものは Ⅱ 類に多い傾向にある。外面調整はナデのものが多いが、口径 Ⅱ 類のものはハケ目調整のものが主である。

鍋（42・43）　口径 25.2 ㎝のもの（42）と 34.4 ㎝のもの（43）とがある。両者とも口縁部は外反し、端部内面に面をもたせている。

これらの土器は形態などから、飛鳥坂田寺 SG100 出土土器と類似する。この土器群は飛鳥 Ⅱ － 1 の標識資料で 650 年代の所産と考えられている。

SX02　須恵器と瓦塼類が認められる。

須恵器　坏（44）、皿（45）、壺（46）がある。

44 は坏蓋で大きな宝珠形のつまみが付く。45 は平底の皿で口径 19.2 ㎝、高さ 3.2 ㎝で底部には粘土紐痕が残る。46 は短く直口する壺で肩部に紐状の把手が付く。薬壺形土器の可能性がある。これらは陶邑Ⅵ中段階にあたり、8 世紀末の年代が与えられている。

瓦塼類　丸平瓦、塼（47）、軒丸瓦（48）がある。丸平瓦については実測図を掲載していないが、平瓦には桶巻き作りで、凸面に細かな縄叩きの後、一部を摺り消すもの（a類）と、一枚作りで幅の広い縄目叩きを施すもの（b類）とが主である。

47は瓦製の塼で、幅9.9㎝を測り、これは唐小尺で4寸にあたる。上面及び側面には縦方向に平瓦b類と同じ叩き痕が残る。

46は青谷式軒丸瓦である。須恵質で紋様も明瞭である。突線で区画された扁平な中房に1＋6に蓮子を配する。この軒丸瓦は平瓦b類と供伴することが多い。

その他　SK03から土師器鍋（49）、P01からは土師器土鈴（50）が出土した。土鈴は体部に円形の孔が開けられており、上部には吊り下げるための孔も開けられている。

SX01出土土器について

SX01からは多くの土師器が出土した。これらは坏が径高指数31前後であること、供伴した須恵器坏身の口径が9.5㎝前後であることから飛鳥編年のⅠ－4～Ⅱ－1段階の資料と考えられる。

飛鳥編年は奈良文化財研究所が発表した7世紀代の飛鳥地域出土土器による編年である。詳細は省くが、7世紀前半を1期4段階（Ⅰ－1～4）に分け、後半を4期5段階（Ⅱ－1・2、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ）に分けている。今回の資料は土師器坏や高坏の形態からⅡ－1段階である坂田寺下層SG100土器群に近い。これらの土器は大化5年（649）～天智3年（664）に使用された冠位「大花下」の木簡が伴った伝飛鳥板蓋宮下層のSK7501から類似した土器が出土していることから7世紀中葉の年代が与えられている。また、最近では甘樫丘東麓遺跡SK184出土土器がこの時期の一括とされている。

しかし、今回供伴した須恵器坏身は、口縁立上り部が受部より突出しており、口径も9.5㎝前後でⅠ－4段階である飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層のものや難波宮下層資料に近い。後者は乙巳の変後の646年、孝徳天皇によって遷都された難波宮の整地層から出土した資料である。この差については、河内では土師器の生産地であることもあり、当時の都の変遷とリアルタイムであるのに対し、須恵器は半段階から1段階古いものが供伴する傾向にあると思われる。どちらにせよ今回の資料は650年前後の資料であると考えたい。

まとめ

今回の調査は、字名「三百坊」が残る場所である。この付近には「地蔵堂」「燈篭堂」など寺院関連の字名や「蔵之東」や「茶園」など葛井寺の施設の存在を推察できる字名も残っている。

調査区は7世紀中葉に渡来系氏族である白猪氏によって建立された葛井寺に近く、瓦類や土器が出土しており、寺院との関連が考えられる。SX01から出土した土器は、付近で焼成された土師器の不良品を廃棄したと考えられるが、その形態が7世紀中葉のものであり、葛井寺創建時期と一致するのは興味深い。

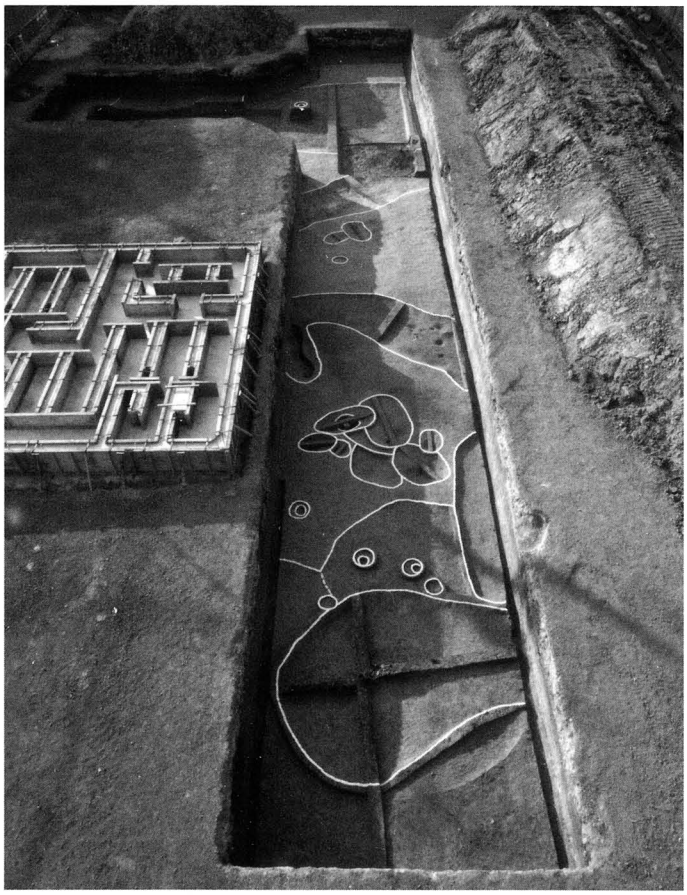

写真1　全景（東より）

また、8世紀後半の土器と共伴して、青谷式軒丸瓦が出土した。これは8世紀中頃の河内国分寺や、河内国府推定地、竹原井頓宮推定地所用瓦である。これに伴う平瓦b類やそれと同じ叩き痕の残る塼も出土しており、同時期に廃棄されたものと考えられる。

8世紀に入ると白猪氏は葛井氏と改姓し、聖武天皇などとの繋がりによって発展していく。それは、8世紀には氏寺である葛井寺で大安寺式軒瓦や難波宮式軒瓦、それに今回も出土した青谷式軒瓦を採用していたことからも傍証できるであろう。（上田）

写真2　SX01 出土土師器

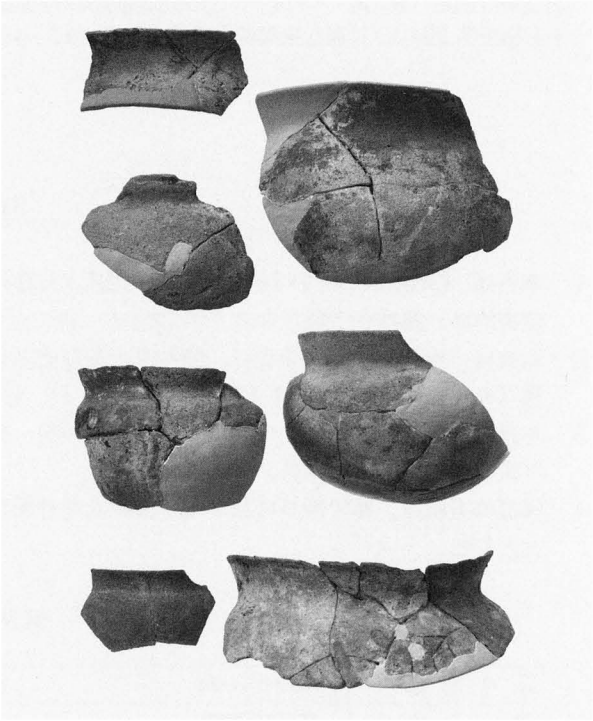

写真3　SX01 出土土師器

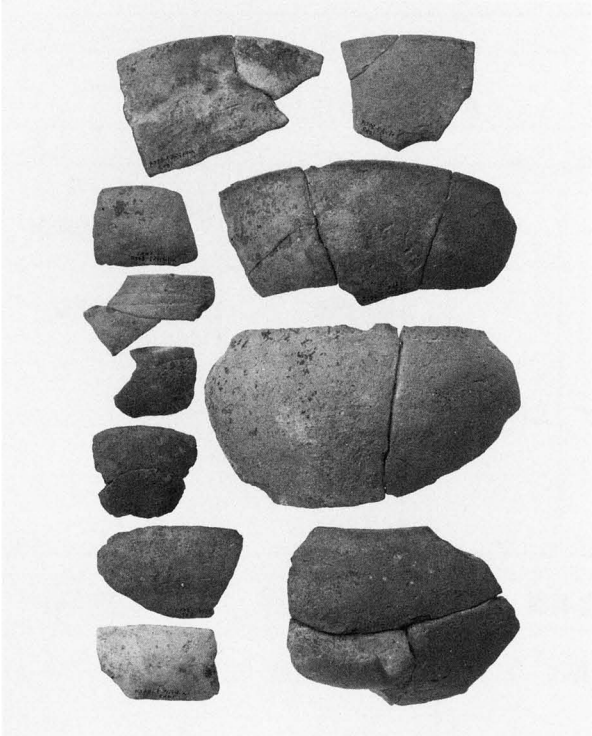

写真4　SX01 出土土師器

写真5　SX02・SK03・P01 出土遺物

≪参考文献≫
安村俊史 1995「竹原井頓宮と青谷遺跡」『ヒストリア』第 148 号
小森俊寛 1997「概説」『7 世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会
小森俊寛 1999「山背北野廃寺溝 SD38 出土土器群の再検討」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集―』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
古関正浩 2001「機内おける青谷式軒瓦の生産と供給」『考古学雑誌』第 86 巻第 4 号
上田睦 2002「KO99 － 8 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告書』XⅦ　藤井寺市教育委員会
上田睦 2005「HY02 － 3 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告書』XX　藤井寺市教育委員会
三宮昌弘 2005「船橋遺跡飛鳥時代前半期の土器の検討」『大阪文化財研究』第 28 号　財団法人大阪府文化財センター
安村俊史 2006「青谷遺跡出土瓦の再整理Ⅰ」『柏原市立歴史資料館報』18
安村俊史 2007「青谷遺跡出土瓦の再整理Ⅱ」『柏原市立歴史資料館報』19
上田睦 2008「HJ04 － 5 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告書』XXⅢ　藤井寺市教育委員会
小田裕樹他 2010「甘樫丘東麓遺跡の調査－第 157・161 次－」『奈良文化財研究所紀要 2010』奈良文化財研究所

例　言

1　本書は、宅地造成に伴い 2008 年度に実施した、葛井寺遺跡（FJ2008 － 5 区）発掘調査の概要報告書である。調査地は、藤井寺市藤井寺 2 丁目 282 の一部に所在する。
2　調査は、申請者の依頼を受け、藤井寺市教育委員会事務局教育部文化財保護課が実施した。期間は、現地調査（外業）2008 年 11 月 17 日～ 12 月 16 日、整理作業（内業）2010 年 1 月 13 ～ 29 日である。
3　本書の作成は、上田睦、今荘ひとみ、尾崎理枝、寺崎理恵が行った。遺構写真の撮影は上田睦が行い、遺物写真は有限会社阿南写真工房にお願いした。
4　図面の方位は、特に断りのない限り座標北を使用した。標高は T.P. を用いた。トレンチ位置図は、上を座標北とした。

報告書抄録

ふりがな	ふじいでらいせき
書　　名	葛井寺遺跡
副 書 名	FJ2008 － 5 区
シリーズ名	藤井寺市発掘調査概報
シリーズ番号	第 5 号
編 集 機 関	藤井寺市教育委員会
所　在　地	〒 583-8583　大阪府藤井寺市岡 1 丁目 1 番 1 号　TEL 072-939-1111 (代)
発行年月日	西暦 2011 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふじいでら 葛井寺遺跡	おおさかふ 大阪府 ふじいでらし 藤井寺市 藤井寺	27226	84	34° 34′ 48″	135° 35′ 53″	現地調査 (外業) 2008 年 11 月 17 日～ 12 月 16 日 (内業) 2010 年 1 月 13 ～ 29 日	208	宅地造成

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
葛井寺遺跡	集落跡	古代	溝、土壙、柱穴	土師器、須恵器、瓦	